

*この作品は、長崎喫茶おやじの会主催「コーヒーにまつわる作品」(平成19年10月1日)優秀賞受賞作を訂正・大幅に加筆したものです。

続

珈琲の思い出

鈴木 優子

46

互いにキスすることだけを考えてここまで来たのだ。和樹は憧れのかわいい女性を二度と離したくない、という思いで優子を強く抱き締めると、優子の唇を思う存分に味わった。

優子は恋い焦がれた和樹の唇に、

「ああ、そうだ、私はこのキスを知っている。私はこのキスを待っていたんだ……。」という既視感と幸福感に浸っていた。

和樹のキスは乱暴すぎず、上品すぎずにとっても上手で、舌先で優子の唇をそつとなぞられると、優子はもう立ってられないくらいに感じてしまった。

一方、優子も愛おしい思いで、和樹の口の中に舌を差し入れると、和樹は思わず、「うっ」とうめいて、密着していた腰を二瞬離した。

どれぐらいの時間が経ったのだろう。二人はひたすらキスをして、互いの唇と舌と歯並びをなぞって味わうことに没頭した。優子は和樹が押しつけてくる固いものの存在に頭がクラクラしそうになり、自分も熱く濡れてきていることとまどいを感じていた。

が、やがて我に帰ると、「和樹さん、ごめんなさい。今何時？私、もう帰らないと……。」と優子はそつと唇を離した。

「あーごめん優子、今ね、8時半だよ。間に合う？」
和樹が慌てて言うのと、

「うん、大丈夫」

「じゃ、帰ろうか。」と和樹は優子の後頭部をぽんぽんと軽くたたいた。

木立を抜ける同じ道を車に戻りながら、和樹は真っ赤になってうつむきながら歩く優子の横顔をうかがっていた。

「優子、ごめんね。僕、失礼なことをして。」

そう言うのと、優子は慌てて顔を上げると、

「ううん、ちがうよー私……すごく嬉しくて……ずっと和樹さんとキスがしたいと思っていたから。」と答えた。

(続く)